
無敵な姉さんはブラコンです

ガスキン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無敵な姉さんはブラコンです

【Nコード】

N9551U

【作者名】

ガスキン

【あらすじ】

魔法が普通に存在するとある世界。その世界で生活する少年には一人の姉がいた。容姿端麗、文武両道、さらには六属性の内の四属性の魔法を扱う姉は、少年にとって自慢の姉だった。しかし、そんな姉にも欠点が……。姉は弟の貞操をガチで狙うとんでもないブラコンだったのだ。この物語は、超絶ブラコンで最強な姉と、そんな姉に狙われる少年の日常を描いたものである。短編第二弾です。旅人の歩む道とは別の物語となります。書き方も少し変えてみました。

(前書き)

第二弾です。今回も急な思いつきで書いてみました。

化物が来たぞ！

やっつける！

来るな化物！ あっち行け！

小さな女の子に向かって、他の子ども達が口々にそう言いながら石を投じている。

痛いよ、止めてよお

女の子は泣きながら許しを乞う。けれど、子ども達は尚も石を投げ続ける。

止める！

いてもたってもいられず、僕は女の子の前に立ちはだかった。

何だよお前。俺達は今、化物退治をしてるんだぞ

僕の姉さんは化物じゃない！

目の前の男の子に掴みかかる。けれど、多勢に無勢。僕は滅茶苦茶に殴られ、蹴られ、全身ボロボロになった。

はあ・・・はあ・・・まいったか

・・・まだだ

気力を振り絞り、立ち上がる。そんな僕の姿に、男の子達は後ずさる。

な、なんなんだよお前・・・

姉さんは化物じゃない・・・謝れ・・・謝れよ！

ひっ！？

僕が怒鳴ると、男の子達は短い悲鳴をあげて逃げて行った。

広人！

姉さん、怪我はない？

私は大丈夫。それより広人の方が！

姉さんは慌てた様子で何かを唱えると、瞬く間に傷が癒えた。回復魔法の『ウォーターヒール』だ。

これどうし？

うん。どこも痛くないよ。さすが姉さん

よかったあ

そろそろお家に帰ろうか

うん・・・

夕日を背に、僕達は手を繋いで歩き出す。

・・・ごめんね広人。私の所為で・・・

姉さんは何も悪くない。悪いのは姉さんを化物って呼んだあいっ
らだ

姉さんは同年代の子と比べて魔力がとても高い。魔法の威力は魔力の強さで決まる。姉さんは、その高い魔力を大きく評価されているが、それは大人だけだ。強すぎる力は時に恐怖を生む。

僕は姉さんの魔法が大好きだよ。さっきの魔法だって優しい感じがしてとても気持ち良かったもん

広人・・・

だから、もしまた姉さんを化物って呼ぶヤツがいたら僕が許さない。姉さんは僕が守ってあげるからね！

・・・うん！

姉さんの顔にようやく笑顔が戻った。やっぱり姉さんには笑顔が一番似合う。

ねえ広人

何・・・

チュ

突然、姉さんが僕の頬にキスをした。あまりに唐突な展開に、僕は固まってしまった。

ね、姉さん！？

えへへ、広人大好き

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・

「……夢か」

どろりで説明チックな内容だったわけだ。時計を見ると、五時三十分を回っていた。

「お弁当作らないと」

僕の名前は黒川^{くろかわ} 広人^{ひろと}。星神魔法学園二年生。僕の一日は、姉さんと僕のお弁当作りから始まる。

家族は僕を含めて四人だけど、父さんと母さんは今いない。父さんは仕事の関係で世界中を周っていて、母さんはそのサポートと一緒にについて行っている。もう何年も家に帰って来てないけど、二人ともとんでもなく強いから特に心配していない。

「というか、『豪炎の勇者』と『風刃の魔女』の二人に手を出さずなんて命知らずじゃないと思うけど……」

『豪炎の勇者』と『風刃の魔女』とは父さんと母さんの二つ名だ。昔、魔法を使った大きな犯罪があったのだが、父さんと母さんがたった二人で解決してしまっただけ。その件が切っ掛けで二つ名がつけられたそう。本人達曰く「勇者ってガラじゃないけどな」「魔女ってイメージ悪いじゃない」との事だけだ。

「……よし、完成」

お弁当が完成した。時計を見ると六時四十分を過ぎている。そろそろ姉さんが起きて来る時間だ。

「おはよう広人」

「おはよう姉さ……」

「? どうしたの広人？」

「ね、姉さん!? どうして下着姿なの!？」

二階から降りて来た姉さんは、黒い下着姿だった。

「ムラムラする？」

「な、何言ってるんだよ!？」

「広人が夜這いして来ると思ってたこの姿で寝てたのに、どうして来てくれなかったの？」

「そんな事出来るわけないでしょ！ 僕達は姉弟だよ！」

「でも、血は繋がってないじゃない」

姉さんの言う通り、僕と姉さんは血が繋がっていない。僕は四歳の時、この黒川家に引き取られたのだ。けど、父さんも母さんも僕の事を本当の息子のように可愛がってくれたし、僕も二人の事が大好きだ。

けれど、姉さんは違う。黒川^{くろかわ} 志乃^{しの}・・・この姉は本当に僕の事を大切に思ってくれているのだが、最近それが行き過ぎているのだ。

なにせこの姉、僕が風呂に入っていると当然のように自分も入って来るし、寝ようと思っただらいつの間にか僕のベッドに潜り込んでいるし、拳句の果てには「夜這いに来て」なんて言い出す始末。本人はからかっているつもりなんだろうけど、こっちは大変だ。姉とはいえ、スタイル抜群の女性にそんな事されてドキドキしない男はい

るだろうか。いや、いない。

「それにしても、このブラもきつくなってきたわね。そろそろ買い替え時かしら」

「そ、そうなんだ。大変だね」

「触りたい？」

「いいから早く服を着てよ！」

「相変わらず可愛い反応するんだから・・・」

バツン！

「・・・へ？」

その時、破裂音と共に、姉さんのブラが外れた。

「あらら、言った傍から壊れちゃった」

僕は慌てて後ろをむいた。後ろから何やらゴソゴソ音がする。

「ねえ広人お、もしかして・・・見ちゃった？」

「な、何を？」

「私のサ・ク・ラ・ン・ボ」

「な、何の事かわからないな」

「ストレートに言つとちく・・・」

「わーーーーっ！ わーーーーっ！！」

耳を塞いで大声を出す。僕は何も見ていない！ 薄桃色の突起なんか見てないぞ！！

「ふふ、もっと広人との甘い時間を過ごしたいけど、そろそろ時間が来ちゃうわね」

そう言って、姉さんは洗面台の方へ向かった。

「・・・はあ」

溜息を吐きつつ、僕も準備の為に部屋に戻った。

・・・

「姉さん、忘れ物はない？」

「大丈夫よ。ハンカチにポケットティッシュ、広人の寝顔の写真もちゃんと持ってるわ」

「・・・最後に聞き捨てならない物があつた気がするんだけど」

「気のせいよ。さあ行きましょう！」

ギョツ！

姉さんが僕の腕にしがみつく。登校時には腕を組んで歩く・・・いつの間にか決められていたルールだ。

「ねえ広人、こんな風に腕を組んでたら、周りからどう思われるかしら」

「姉弟でしょ。というか、それ毎日言ってるよね」

「やくん、広人に突っ込まれちゃった　でも、どうせなら広人のそれを私のここに・・・」

「あー！　今日は天気がいいね姉さん！」

姉さんの視線の先を確かめる勇氣は、僕にはなかった。

「相変わらず朝からとぼしているな志乃」

僕達の前に、凜とした佇まいの女性が現れた。

「おはよう今日子」

石田 今日子先輩……姉さんと同じクラスの先輩だ。その端正な顔つきや、男っぽい口調で、学園の男子だけでなく、女子にも人氣が高い。

「おはようございます今日子先輩」

「おはよう広人君。今日もキミは可愛いな」

「え？ あ、ど、どうも……」

どういいうわけか、僕はこの先輩に気に入られている。具体的に言う……姉さんと同じレベルで。

「ところで広人君。昨日ケーキを焼いたんだが、食べに来ないかい

？」

「いいんですか？」

「もちろんだ。キミの為に焼いたと言っても過言ではないからな」

「嬉しいです。先輩の作ったケーキとても美味しいですから」

以前食べさせてもらったチョコレートケーキの味を思い出し、僕は無意識に笑みを浮かべていた。

「そ、その笑顔は反則だ・・・／＼」

「はい？」

「な、何でもない」

「ちょっとちょっと！ 私を無視して勝手に話を進めないでよね！
広人、ケーキくらい私がつってあげるわよ」

「ほお、毎日広人君に料理を作らせているお前がか？」

「う・・・」

黒川家の調理担当は僕だ。姉さんは壊滅的に料理が下手で、必然的に僕が作るようになったのだ。

「そ、それより二人とも、早く行かないと遅刻しちゃうよ」

「そうね・・・どうせ今日も「あれ」が待ってるだろうし」

三人で通学路を歩く。やがて、学園の校門が近づくと、グラウンドの方に大勢の男子生徒の姿が確認できた。

「今日は三十人ほどか」

「毎日毎日よくも飽きないわね」

「それだけお前が魅力的だという事だろう」

「広人以外に想われても迷惑なだけよ。それより今日子、ちゃんと広人を守ってよ」

「任せておけ。私がいる限り、広人君には砂粒一つ当てさせん」

グラウンドに入ると、男子生徒の一団が一斉に姉さんに向かって近づく。

「黒川 志乃さん！ 今日こそあなたを倒して、彼女になってもらいます！」

男子の一人が歩み出る。姉さんは気だるそうに髪をかきあげた。

姉さんは身内鼻屑無しでもかなり綺麗だと思う。腰まで伸びる艶やかな黒髪、整った顔だち、抜群のスタイル、社交的な性格と非の打ちどころがない。当然男達が放っておくはずがなく、連日のように告白する生徒が後を絶たない。

けれど、本人は誰とも付き合う気はないようで、「私を倒す事が出来たら付き合っただけあげる」なんて言ったものだから、毎日こつこつと勝負を挑まれているのだ。

「時間も無いし、来るなら早く来てちょうだい」

「いきますよ黒川さん！ 『フレイムアロー』！」

炎で出来た六つの矢が、一斉に姉さんに襲い掛かる。けれど、姉さんはまったく焦った様子もなく右手を軽く振った。

「『ウォーターシールド』」

展開された水の盾が矢を全て飲み込む。姉さんはさらに左手を掲げて叫んだ。

「『ウインドスラッシュ』！」

「ぬわーっ！」

風で出来た不可視の刃が、男子生徒を一瞬で吹き飛ばした。

「さすが『スペルクイーン』だね。初級魔法の『ウインドスラッシュ』であの威力とは」

今日子先輩が呟く。魔法には火・水・地・風の四大属性と、光・闇の二極属性の六つの属性がある。姉さんは、その四大属性全てを扱う事が出来るのだ。四大属性を扱えるのは、世界でも姉さんを含めて数人しかいないらしい。

「（昔は僕が守るなんて言ってたけど、今じゃすっかり守られる側だもんな）」

父さんも母さんも姉さんも、魔法に関しては最強クラスだけれど、僕は三人と違って魔法が苦手だ。それというのも、僕が扱えるのは光魔法だけで、しかも発動にかなりの魔力が必要となる。上級魔法など撃つたら二、三日は寝たきりになってしまうほどだ。

「めんどくさいわ。まとめてかかってらっしやい」

姉さんが再び右手を掲げた。その掌には、四大属性全ての色が混ざった魔力玉が乗せられている。

「おいおい、『あれ』を撃つ気か？」

「『フォースブレイカー』!!」

ドッゴオオオオオオオオオオン!!

凄まじい爆発音と閃光が僕を襲う。やがて、ゆっくり目を開けるとそこには地に伏している男子生徒達と、それを見て溜息をついている姉さんの姿があった。

「さすが黒川先輩！」

「今日もお見事です！」

「後始末は俺達にお任せ下さい！」

周りにいた生徒達が歓声をあげる。中にはタオルを渡している女の子もいる。

「終わったようだな。私達も行こう」

「そうですね」

気絶している男子達に心の中で手を合わせつつ、姉さんに駆け寄ってそのまま一緒に下駄箱に向かった。

「ああ、広人。私、お別れしたくないよ」

「昼休みまで我慢しろ。それじゃあ広人君、また後でな」

「はい。姉さんをお願いします」

「ひ~~~~ろ~~~~と~~~~」

引き摺られていく姉さんを見て、一瞬頭に『ドナドナ』が流れた。

「僕も教室に急がなきゃ」

教室に入ると、すでに大半のクラスメイトがやって来ていた。

「おはよう広人。今日も大変だったみたいだな」

席に着くと、隣の石田君が話しかけて来た。

「おはよう石田君。もう慣れちゃったよ」

「あはは。でも、あんな綺麗な姉さんを持って羨ましいよ。やっぱり家だと下着姿とか見れちゃったりするの？」

「ッ……!!」

朝の出来事を思い出して、顔が熱くなった。

「? どうした広人? 顔が赤いぞ」

「な、何でもないよ」

何とか誤魔化しつつ、鞆から教科書を取り出すと、ちょうどチャイムが鳴った。

「席につけ、ホームルームを始めるぞ」

授業は滞りなく進み、あつという間にお昼休みになった。

「広人〜〜! 一緒にお弁当食べよ〜〜!!」

扉が開き、姉さんが教室に入って来た。後ろには今日子先輩の姿もある。

「うん。今日は何処で食べるの?」

「天気もいいし、中庭はどうだい?」

「そうね、そうしましょう」

「石田君も一緒にどう?」

「んあ? 俺もいいのか?」

「もちろんだよ」

石田君も誘って四人で中庭に出た。芝生で出来た広場の中心に座り込んでお弁当を開く。

「相変わらず、お前の弁当美味そうだな」

石田君が僕のお弁当を覗き込んでそう言った。

「食べてみる?」

「マジで？　じゃあこの唐揚げを・・・」

石田君が唐揚げを口に入れる。その途端、彼の目が見開かれた。

「うおっ！？　何だこれ！？　滅茶苦茶美味い！！」

「ホント？　よかった」

「いや、マジで美味しいよ。くそ、お前が女だったら即行で告ってたのにな」

「駄目よ！　広人は私のお嬢さんになるんだから！」

「聞き捨てならんな。広人君は私の夫となる男だ」

「えっ！？」

「両手に花だな広人」

「い、いいからお弁当食べようよ！」

これ以上からかわれてもたまらないので、僕はお弁当を食べる事に集中した。

「ごちそうさま。今日も美味しかったよ広人」

「おそまつさま。喜んでくれたみたいでよかったよ」

「お返しは、夜のベッドで存分に・・・ね？」

「はいはい」

「うわーん、広人が冷たいよー」

「お前・・・もうそんな関係に・・・」

「信じないでよー！」

こうして、騒がしくも楽しいお昼休みは終わり、午後の授業が始まった。

「・・・ん？」

窓際の席からなんの気なしに外を眺めると、ちょうど姉さんのクラスが体育の授業を行っていた。

「（ソフトボールか・・・）」

ただのソフトボールじゃない。魔法ありのソフトボールだ。風の魔法でボールの球速を上げたり、地の魔法でランナーの進塁を邪魔したり何でもありのルールだ。

「（あ、姉さんの打順だ）」

「頑張れ黒川さーんっ！」

バットを構えた姉さんに隣のクラスから声援が飛ぶ。どうやら授業そっちのけで観戦しているみたいだ。・・・何で先生止めないんだろっ？

ビシュ！

ピッチャーがボールを投げた。風の魔法によって球速を大きく上げたボールが姉さんに迫る。

ギイイイイイン！！ バガン！！

「（・・・うわあ）」

前者はボールを打った音。そして後者は・・・打ち返されたボールが校舎の壁にめり込んだ音だ。啞然とする周りをしり目に、姉さんは悠々と塁を回っている。

「な、何の音だ？」

石田君が驚いた表情で尋ねて来たけど、僕は苦笑いを浮かべる事しか出来なかった。

・・・

午後の授業が終わり、部活に入っていない僕は帰宅する事にした。姉さんと待ち合わせる為、玄関で待機しておく。

「広人」

「姉さん、鞆は？」

「ゴメンね広人、ちょっと用事が出来ちゃったの。本当なら無視して一緒に帰りたいんだけど、どうしても断れなくて。悪いんだけど、先に帰っててくれない？」

「わかった。じゃあ、先に帰らせてもらっね」

「本当にゴメンね。帰ったらたっぷりお詫びしてあげるから」

そう言って、姉さんは駆け足で去って行った。

「さてと・・・じゃあ、買い物でもして・・・」

「黒川 広人だな？」

校門を出ると、突然数人の女の人に囲まれてしまった。

「？ そうですけど・・・」

「悪いけど、黙ってついて来てもらおうよ」

S I D E O U T

志乃 S I D E

「もうこんな時間だわ」

早く帰らないと、きっと広人が心配してるはずだ。

お帰り姉さん

ゴメンね広人。寂しかったでしょ？

姉さんが帰って来てくれたからもう大丈夫だよ

嬉しい事言ってくれるじゃない お礼に、今日は一緒に寝てあげるわ

ホントに？ やったあ！

あらあら、私と寝れるのがそんなに嬉しいの？

うん！ 僕、姉さんと一緒に寝るのが好きだもん！

広人~~~~

.....

.....

.....

「えへ.....えへへ.....」

これからの展開を妄想し、私は涎を垂らしながら下駄箱を開けた。

「.....あらっ..」

靴の上に手紙が置いてあった。ラブレターかしら？

「なにになに・・・」

『お前の大切な弟は預かった。返して欲しければ、町外れにある倉庫まで一人で来い。もし、誰か一人でも連れて来たら、弟の安全は保証しない。レッドキャッツ総長叢雲 命』

「・・・」

何これ？ 脅迫状？ レッドキャッツって何？ 弟？ 広人の事？
広人を預かった？ 町外れの倉庫？ 安全は保証しない？ この
字・・・女？

「・・・殺す」

広人に手を出すヤツは・・・広人を傷付けるヤツは・・・私が残らず殺してあげる。

ある日突然出来た弟。最初は戸惑ったけど、あの子は高い魔力を持つ私を恐れずにすぐに懐いてくれた。化物と呼ばれていた私を守つ

てくれた。私の我儘にずっと付き合ってくれた。あの子の存在は私にとってかけがえのないものとなるのに、時間はかからなかった。

「私は広人が大好き・・・だから、広人は私が守る。昔、あの子が私を守ってくれたように・・・!」

手紙を握り締め、私は学園を飛び出した・・・

志乃SIDE OUT

IN SIDE

僕が連れて来られたのは、町外れにある大きな倉庫だった。そこには、女の人がざっと五十人ほどいた。

「ここは、アタシらの集会場さ」

「あの・・・あなた達はいつたい・・・?」

「レディースチーム『レッドキャッツ』。アタシは総長の叢雲命だ」

改めて見ると、全員が所謂特攻服と呼ばれる物を着ていた。テレビでしか見た事ないけど、本当に存在してたんだ。

「すまないね。急にこんな所に連れてきたりして」

「何故僕をこんな場所へ？」

「あなたには、黒川 志乃を呼びだすエサになってもらうよ」

「姉さんを？」

「あの女の名はアタシ達にも届いてるんでね。『スペルクイーン』をぶっ倒しちゃ、アタシらの名にもハクがつくってもんさ」

「つまり、姉さんと勝負したいという事ですか？」

「そうさ。その為に、弟であるアンタを拉致ったわけだが・・・だからと言ってアンタに危害を加えるつもりはないよ。あの女が来たらすぐに解放してやるからね」

「お菓子でも食べるかい？」

「ジュースもあるよ」

椅子に座った僕に、他の人達が色々な物を渡してくれる。どうやら悪い人達じゃないみたいだ。それどころか・・・

「……………」

「？ どうしたんだい？」

「いえ、みなさん優しいなと思って」

「んなっ……………」

僕がそう言つと、何故かみんな顔が真っ赤になった。

「ば、ばばば馬鹿な事言つな！ アタシらのどこが優しいってんだよ！？」

「そ、そんな事言われても全然嬉しくないんだからな！」

「ふ、ふざけた事言つとぶっ飛ばすよ！」

「だって、僕の事気遣ってくれてるじゃないですか。普通、こういう状況じゃ縛られたりするものだと思うんですけど」

「そ、そんな事したら痛いじゃないか！」

「……………この人達、レディースに向いてないんじゃないのかな？」

「と、というか！ 何でアンタそんなに落ち着いてるんだい！？」

「こついった騒ぎには慣れてるんです。姉さん、いろんな人に絡まれるんで、必然的に僕も巻き込まれちゃうんです」

「……アンタも苦労してるんだね」

「あはは。だからちょっとやそつとの事じゃ動じなくなっちゃったんですよ」

和気藹々と話をしていると、いつの間にか辺りはすっかり暗くなっていた。

「しかし遅いね……何してんだいあの女は」

「今日は用事があったようです」

「そうなのかい？ 悪い日に決行しちゃったようだね。暗くなってきたし……誰か、明かりになるようなもの持ってないかい？」

「僕に任せてください」

光属性の初期魔法『シャイン』を唱えると。倉庫内が昼間のようになり明るくなった。

「じ、これは……？」

「光魔法の『シャイン』です。これで、しばらくの間は明るくなり

ます」

「あ、アンタ！ 光魔法が使えるのかい！？」

「まだ完全にじゃないですけどね」

「マジかよ……」

「私、初めて見たよ」

「ウチも」

「なあなあ、他にはどんな魔法が使えるんだい？」

「そうですね。他には……」

「見せる必要はないわよ広人」

「……ッ！」「」「」

聞き慣れた声に目を向けると、倉庫の入り口に姉さんが立っていた。

「あ、姉さん」

「大丈夫広人！？ 酷い事されてない！？」

「よく来たね黒川 志乃！ アタシが『レッドキャッツ』の総長、
叢雲 命だよ！」

総長さんが前に躍り出る。すると、姉さんは僕に向けたものとは百八十度違う鋭い表情で総長さんを睨みつけた。

「そう・・・あなたが・・・あなたが広人を・・・」

「（うわ、あの目・・・本気で怒ってる）」

「さあ、黒川 志乃！ アタシと勝負しな！」

「勝負・・・？ 何それ？ 私はね・・・」

ボンッ！

突如、倉庫内にあつたコンテナが音を立てて爆発した。それは、溢れだした姉さんの魔力が起こした爆発だった。

「あなた達全員を殺す為に来たのよ！！！」

「ッ！？ ぐあっ！」

一瞬で距離を詰めた姉さんが、総長さんを燃え盛る右拳で殴り飛ばした。自身の動きを爆発的に速める『ゲイルムーヴ』と、炎を宿らせる『フレイムエンチャント』を同時に発動させたのだ。

「総長!？」

「二属性を同時発動!？」

「『ゲイルムーヴ』ってあそこまで速くなるもんなのか!？」

「ぐ……くくっ、流石『スペルクイーン』……やるじゃねえか」

口の端から血を流しながら、総長さんが立ちあがった。

「殴り合いなら負けやしないよ! 『ガイアエンチャント』!」

総長さんの右拳を、巨大な岩が覆う。そのまま姉さんに向かって右拳を叩きつけるように放った。

「『アクアブレード』!」

ブ
ッ
ッ
ッ

「……っしゅっしゅ」

半身をずらして避けた姉さんは、左手に持った水の剣を総長さんのわき腹にぶつけた。斬れはしないが、相当な衝撃が襲ったはずだ。

「そ、そんな・・・総長が手も足も出ないなんて・・・」

「あれが・・・『スペルクイーン』」

「ま、まだだ・・・」

「総長！」

ふらつきながらも、総長さんは再び立ち上がった。

「アタシは負けない・・・チームの為に・・・アンタを倒す!!」

「もっつんざりよ・・・これで終わらせてあげるわ」

姉さんが右手を高く上げ、四属性を纏めていく。

「そ、その魔法は・・・!!」

「これで、この倉庫ごとあなた達を消してあげる」

「待つんだ姉さん!!」

「広人に手を出した報い・・・その身で受けなさい！」

姉さんが右手を振り下ろす。その刹那、僕は魔法を唱えた。

「フォースブレイカー!!」

「ライトニングウォール!!」

総長さん達の前に巨大な光の壁が展開される。発動すれば、どんな魔法でも完全に遮断する・・・それがライトニングウォールだ。上級魔法の中で、唯一気絶する事なく扱える魔法だった。

光が収まると、ライトニングウォールが展開されていた場所以外が全て吹き飛んでいた。夜の冷たい風が肌を突き刺す。

「あ・・・あわわ・・・」

僕と姉さん以外の全員が腰を抜かしていた。まあ、あんな規格外な魔法を見せられたら無理もないと思うけど。

「もう、広人！ 何でそんなヤツら庇うのよ！」

姉さんは不機嫌そうに頬を膨らませていた。その子どもっぽい仕草に少し吹き出しつつ、僕は口を開いた。

「姉さん、フォースブレイカーはやり過ぎだよ」

「だってだって！ そいつら、広人を攫って酷い目に・・・」

「僕は何もされてないよ。それどころか、お菓子やジュースまでごちそうしてくれたんだよ」

「・・・へ？」

「総長さん達は始めから僕を傷付けるつもりはなかったんだ。ただ、姉さんと勝負がしたかっただけなんだよ。ですよね、総長さん？」

「は、はい！ そうです！」

よっぽど怖かったんだな。口調が変わってるよ（苦笑）。

「だからと言って、広人を巻き込んだのは許せないわ」

「許してあげてよ姉さん。この人達、本当はいい人なんだよ」

「でも・・・」

仕方ない、この手だけは使いたくなかったんだけど・・・

「……許してくれたら、今日一緒に寝てあげる」

「許すわ！ それはもう全力で！！」

よし、これで総長さん達の安全は確保出来たぞ。

「あ、アンタ……どうしてアタシ達を庇って……」

「僕、みなさんみたいな優しい人好きですから」

「え……／＼」

「広人……早く帰ろうよ……」

「倉庫、壊しちゃってごめんなさい。それじゃあ、さようなら」

最後に頭を下げて、僕は姉さんと共にその場を後にした。

「さあさあ広人！ 早く寝ましょうよ」

そして、約束通り、今夜は姉さんと一緒に寝る事になった。

「広人から一緒に寝ようって言うてくれるなんて・・・お姉ちゃん嬉しい」

「（絶対、姉さんより先に寝たらいけない）」

「はあっ・・・はあっ・・・広人お・・・／／」

僕の胸に顔を擦りつけて来る姉さんを見つめながら、僕はジッと時間が過ぎるのを待った。

翌日・・・

「ははは、それは大変だったな広人君」

昨日の事を話すと、今日子先輩は楽しそうに笑った。

「笑い事じゃないわよ。私、本当に心配したんだから」

「ゴメンね姉さん」

「いいのよ広人。おかげで美味しい思いも出来たし」

ニヤケる姉さん。傍から見ると不気味だ。

「おっと、そろそろ校門だ。志乃、準備しておけよ」

「上等よ。広人成分が補給された今の私に敵はいないわ!」

けれど、今日はいつもと少し様子が違った。校門の前に、見慣れぬ一団がいたからだ。

「あれは……『レッドキャッツ』のみなさん」

「な、なんである人達がここにいるのよ」

「ほお、あれが件のレディースチームか」

校門前にたどり着くと、総長さんが前に出て来た。

「懲りないわね? また戦う気?」

「ふん、今日の相手はアンタじゃねえよ」

「え?」

「おはようございます総長さん」

「お、おはよう広人くん……/」

「「広人クン？」」

「朝からどうしたんですか？」

「広人クン・・・アタシ・・・広人クンに惚れちゃったんだ！」

「え・・・ええ！？」

「「なん（ですって）（だと）！！」」

「アタシ達は広人クンに酷い事をした。それなのに、広人クンはアタシ達の事を庇ってくれた。アタシは・・・広人クンの優しさに惚れたんだ！」

「私も広人クンの事が好きになっちゃった！」

「アタイもだ！」

「『レッドキャッツ』のメンバー全員、広人クンに惚れちゃった！
どうか傍にいさせてくれ！」

「えと・・・その・・・」

突然の事に、僕は頭が真っ白になって何も返せなかった。

「ふ、ふふふ・・・」

「志乃？」

そして、今日も学園に閃光と爆音が轟くのだった・・・

(後書き)

もっと深く書いてみたかったのですが、短編という事でこれくらいにしてみました。気に入って頂けたら連載物にして……ないか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9551u/>

無敵な姉さんはブラコンです

2011年9月18日14時45分発行